

〔通信欄〕

気象を研究する仲間として

—大学院生の研究生生活，その詩と現実—

気象若手会世話係 木田 秀次*

はじめに

昨秋，学会の札幌大会に際し，北大クラーク会館において，気象若手会に属する全国の大学院生及び気象研究者のおよそ60名が一堂に集い，夕食を共にしながら，各人のかかえている問題や意見を交流し，討論した。その場で議論された問題とは，大学院生（卒業生及び卒業予定者）で就職できない人が多いこと，大学での研究費不足，研究上の指導不備及び各大学・研究所らの交流不足などが主なものであった。これらの問題は若手会が誕生して以来何度も議論されて来たものばかりであり，今もって明るい見通しもなく，この度の討論会も通夜の如く，晩秋の札幌の夜気ですっかり若い心が冷えてしまったのも無理からぬことであった。

1. 大学院と院生の研究

そもそも大学院というものがどのような制度であるかをあまり知らない方も多いと思われるので，最初に大学院の概略を説明しておこう。昭和22年発行の学校教育法第65条で「大学院は，学術の理論及び応用を教授研究してその深奥をきわめて，文化の進展に寄与することを目的とする」ということになっている。しかしこれでは何も明らかでない。そこで学生の側からみとみることにする。要するに学生にとっては，大学の4年間で勉強したことだけでは専門的問題において不足であり，特に将来専門的問題にとり組もうと思う場合には研究の指導を受ける必要がある。東大の理学部においては，大学卒業者の90%以上が，入学試験を受けた上で大学院に進学している。こうして修士課程に進学した者は二年間，自分の選んだ研究室において多かれ少なかれ指導教官の直接的な指導を受けながら，あるテーマを研究し，それを修士論文として仕上げることを学ぶ。その間，大学院で，講義・セミナー及び教官・先輩・同僚らとの議論を通して，研究上の知識や経験を積むことになる。そして理学

修士になり，研究機関や社会に就職する人もあるが，大部分の者はその後3年満期の博士課程に進学し，専門的なテーマを，指導・助言を受けつつ，主体的に研究することになる。そしてその課程期間で成果が上がった時，論文審査を受けた上で理学博士となるのである。

それでは，院生はどのように自分の研究テーマを選定し，研究しているのか。修士課程に入学したばかりの時は，すぐには研究に取りかかっているのが普通で，何カ月かは気象学の専門的な基礎勉強だけで時日が経過する。このような勉強の途上，教官や研究室の人達から助言や刺激を受けてテーマの概略が定まってくるようである。博士課程においては，研究テーマを主体的に選定するのが常識である。思えば，研究室では専門書や新着雑誌などがほとんど自由に利用できるし，学会やシンポジウムにも参加できる機会も多い。さらに気象以外の研究室の人達とも情報交換による耳学問も可能である。大学院生は大変恵まれた研究条件にあるように見える。

2. 大学院生の困難

大学院で勉強し研究するということは，同時に生活の問題を含めて考えなければ片手落ちである。大学を卒業した後，大部分の院生は，およそ5年の間奨学金（2万円前後）とアルバイトによってのみ生計を支えねばならないことになる。結婚を子供が生まれれば，その経済上の圧迫は極めて大きくなり，結婚するのに消極的な院生が多い情況（東大院生白書によると半数以上）はあわれでさえある。その上なんとか頑張って5年間を切りぬけたところで，適当な就職口がなく，失業状態に追い込まれる場合があり，こういう人が気象の大学院生の中だけでも全国に10名ほどいるのが分かっている。必然的に，気象の研究をすてる人も出て来るし大学院に在学している者も，自分の将来に不安をいだくようになっていく。これはまた気象研究の後継者にも影響してくる。

上述したように，大学院生は恵まれない生活条件の中で研究を続けているのであり，私事を許されるならば，

* 東京大学理学部地球物理学教室

時に何故気象に飛びこんでしまったのかと自嘲的になることもあるが、どうしても気象に対する童心的な興味と研究の必要性に対する信念をすてることが出来ずにいるのである。

3. 院生として考えること

院生の立場で気象研究体制の現状に対処する場合、2.において紹介したように気象を捨てるという形で現われる場合もあるが、今はあくまでも現状を改善するという方向で努力すべきだと思う。

何故気象は、大学院や研究所で研究し続けなければならないか。

気象学が社会の福祉に貢献する道は幾通りもあるが、代表的で分かりやすい例は天気予報であろう。その天気予報は、広い意味での気象力学の大きな成果に基づき、現在数値予報として実を結んでいる。勿論その数値予報もまだまだ不完全であるので改良することや、より難かしい要求に応えるために一層の研究が必要となっている。その場合の研究は、専門的な深い知識と洞察力ぬきには進歩し得ないの言うまでもない。従って、高度な研究者が不可欠である以上、その育成は不可欠である。このように考えてみただけでも、大学や研究所の活力を高めることは単にその大学や研究所の個別的な問題でないことが分かるし、たとえ気象の研究に直接従事していない人にとっても他人ごとでは有り得ない筈である。

然るに気象研究体制の現状をみると、人材及び能力を育成するという方針がうかがえない。それは、研究者の

層のうすさ、人的活力の欠除、研究者の能力の停滞、研究の成果不足、気象学の存在理由の低下、というような循環をめぐる。この悪循環を断つには、中央や地方での気象研究環境を改善することがポイントである。

一方大学の研究予算は全く貧弱であり、おのずと計算機の使用時間等も少なくなり、そのため研究テーマの完成が不可能であることも起るし、新しい問題を追求するのに制限ができることにもある。大学での研究予算や研究室の拡充は絶対に必要なことである。それと共にトップレベルの研究を可能とし、且つ研究能力を育てるという観点から、大気物理研究所の設立は切に望まれるのであり、そのために努力しなければならないと思う。

4. おわりに

気象の体制の問題は、広く深く社会の構造の中でとらえなければ解決しえないことである。しかし今そのことにふれることは私の能力を越えている。そこで現実に院生が直面している問題について、改善しなければならないと思うことにふれるに止まっている。気象庁関係の人の中には、中央でも地方でも厳しい研究条件の下で地道に研究されている方も多いことを知っている。そういう人達は大学院生と仲間である筈だと思う。

色々な方から、御意見、批判が寄せられることを望みます。

参考までに：東京都文京区弥生2-11-16

東京大学理学部地球物理学教室

気象研究室 木田 秀次